名古屋芸術大学研究紀要第44巻　121～130頁（2023）

ヴァーチャル交流と英語学習意欲に関する探索的実践報告
芸術系学生に適切な英語教育の成果測定とは
― Willingness to Communicate と国際的志向性に着目して ―

An Exploratory Report on Virtual Exchange and Motivation to Learn English
Appropriate Assessment of Achievement in English Education for Arts Students
— Focusing on Willingness to Communicate and International Posture —

松崎　久美　*MATSUZAKI Kumi*
（デザイン領域）

１．はじめに

本稿は、名古屋芸術大学における英語教育の実践報告である。2020年４月よりこれまで教室で行われていた教育活動が、ICT ツールを活用した教育手法に変更となった。有効な教育手法を探るために、オンデマンド型（非同期型）、リアルタイム型（同期型）または学生がどちらかを自由に選択できるハイフレックス型などの学習モードの活用を、筆者が担当する英語クラスにおいて試験的に実施してきた。一クラスの実践であるため本授業実践で得られた示唆が一般化できるとは言い難い。しかし、本学の学生像として英語に対する自己肯定感が低く、教室内の学びと現実社会の実践とのつながりが希薄であることが、特徴として浮かび上がっている（松崎，2021）。本事例報告が、英語関連科目のみならず、国際的な接触を専門科目に導入する際に有効な視点を提供することを目的としている。

２．実践の背景

2-1. 大学の国際化を取り巻く環境の変化

高等教育の国際化施策である学生の移動は、「留学生受け入れ30万人」計画や「日本人学生の留学者数12万人」といった目標数値を掲げ国家の施策として推進されてきた。日本学生支援機構による統計では、日本人の海外留学者数は、2018年度には115,146人となり目標達成を間近だったが、2020年度の海外留学者数は前年度比98.6％減の1,487人と激減した。また、海外から日本に留学する学生は、2019年に目標の30万人を達成したが、それ以降は減少している（文部科学省，2022）。高等教育の国際化を牽引してきた施策である学生の移動とそれを推進してきたグローバル社会の拡大は、コロナパンデミックとその後続いた世界情勢の変化により、これまでと同じ方法で展開していくことが困難となった。

一方で、COVID-19に対する高等教育の反応は、特にテクノロジーの利用、教授法、官僚的な規則や手続きにおいて、急速な変化が可能であることを実証した（Hudzik, 2022）。

大学の国際化における“ヴァーチャルな教育（Virtual Education）”は1990年代から国際化に纏わる語句として使用されてきたが、それは学生の移動に置き換えられるものではないと考えられてきた（Knight, 2007）。しかし、国際的な人の移動を制限した2年間で、ICTを活用した教育手法により、場所の制限なく多くの人々のアクセスが可能になるオンラインの利点を最大限に活かした、国際的な教育はオンライン留学やCOILに代表される新しい形態の活動へとパラダイムシフトした。これまで、国際的な教育活動へのアクセスは、限定的であり特定の社会階層の再生産を促していると指摘されてきた。特に、英語はグローバル化における国際言語であるため、英語を母語としない国家にとって英語ができるかどうかはエリートか否かを分ける重要な違いをもたらす（Lauder, 2012 本田訳, 2012）。COVID-19がもたらした負の遺産は大きいが、それに対応しようとするダイナミクスな原動力は、ICTツールの設備や技術的な知識に対する個人差は未だに存在するものの、より多くの学生に英語を使用する国際的な実践活動へのアクセスを可能とした。

2–2. 事業背景

本取り組みは、2020年より本学の1年次前期の必須科目である共通外国語科目「英語1」の受講者に対し継続して実施している「英語に関するアンケート」に端を発している。その結果、先に述べたように「英語が苦手」「海外や国際的な接触経験がない」という本学生の特徴が顕著に見られた。英語の苦手意識を克服することと、「本物」のコミュニケーションを経験させる事が。英語学習への成果へつながる可能性を感じられたが、2020年より授業が対面から非同期または同期型になったことで、授業内のみならず、大学において直接的なコミュニケーションの機会を確保できない状況だった。当然のことながら、海外短期研修、派遣・受入交換留学、大学内の国際化に資する活動も中断し、海外や留学生との接触を通じた学生の異文化間理解や語学力を成長させるための正課内外の活動ができなくなっていた。一方、ICTの活用により、これまで障害となっていた経済的、時間的、肉体的な負担を最小限に抑え、より多くの人が国際的な活動への参加が可能となり、2020年試験的にヴァーチャル交流会を実施した。十分な事前準備がない状態で実施したが、学生はリアルな文脈で英語を使用し成功体験を経験することで、英語学習への動機が高まっていた。また、アンケートでは事前の準備が重要である等、次へとつなげるための貴重な示唆が得られた（松崎，2022）。

2021年度も引き続き授業モードが変わらず、人との接触、コミュニケーションを通じた英語学習、国際的な活動が制限された。そのため、前年度の反省点を踏まえ、オンラインによるヴァーチャル交流を授業実践として企画した。学生たちの英語学習に与える影響を既存の指標を利用して調査し、その成果について検討する。

3. 調査内容

3–1. リサーチクエスチョン

本調査では、ヴァーチャル交流が英語学習意欲に与える影響を測定するために「第二言語で自発的にコミュニケーションを図る意思（Willingness to Communicate in L2, 以下WTC）」と「国際的志向性（International Posture）」の指標を使用し、以下の問いを立てた。

リサーチクエスチョン： 海外経験の少ない学生が、英語の授業において、日本人同士の定型会話練習ではなく、海外の学生と英語を使用した本物の交流をすることで以下の変化は生じるのか。 利用する理論枠組み： 第二言語で自発的にコミュニケーションを図る意思（WTC） 国際的志向性

WTCは、ある状況下でコミュニケーションをする学習者の意欲を表す概念である（Macintyre, et al., 1998）。実際に交流会を通じてコミュニケーションをする機会を導入し、WTCがどのように変化したかを調査する。国際的志向性は、WTCに影響することが報告されている（Yashima, 2002）。海外との接触が国際的志向性へ及ぼす作用と、さらに英語学習の動機づけとしてWTCに与える影響について調査する。

3–2. 調査参加者

参加者は、筆者が担当する英語授業を履修している美術領域に所属する大学1年生と過年度履修生である。調査の回答漏れなどによるデータ欠損を除いた23名が最終的な調査参加者となった。そのうちヴァーチャル交流会に参加したのは15名、非参加者は8名である。英語に関する資格保持者は1名、海外旅行経験者は2名で、海外での生活経験者や長期留学経験者は参加者にはいない。

3–3. 調査方法

Yashima（2009）の質問紙を使用し、交流を実施する前後のWTCと国際的志向性の変化を調査した。授業は原則非同期型で実施していたため、質問はGoogle Formを使用している。交流会は2回実施し、調査1回目は11月、2回目は1月となっている。1回目参加後すぐに感じた印象を記録に留めるため、これら調査とは別に交流会参加の感想を自由記述で回答を得た。WTCは、ある状況下（8項目）におけるコミュニケーション意欲を問うものである。WTCは、言語の障壁に関わらず日本語においてもコミュニケーション意欲は高くない可能性もあるため、日本語を使用する場合と英語の場合とそれぞれに回答を求めた。国際的志向性は、28の質問から構成されており⑴身近な異文化へのリアク

ション、⑵国際的な職業への関心、⑶違いに対する反応、⑷海外での出来事・国際問題への関心、⑸世界に伝えたいことがあるという意識、の５項目を測るものである。英語専攻や英語関連のゼミ、国際的ボランティアに参加する学生への調査で過去に使用されている（渡邊，2017；飯野，2015；八島，2009）。「国際」「英語」という学問分野と親和性が低い芸術系学生に使用することへの意義には検討の余地があるが、他の事例に倣い調査に使用した。

４．実践概要

4–1. 交流会目的

本学では2020年より英語の授業は、コロナウィルス感染防止の観点からGoogle Classroomを使用したオンデマンド授業（非同期型）が推奨されてきた。そのため、語学学習で習得すべき技能の一つである「話す」練習は、実践が制限されていた。また、留学や人々の移動が制限されたことで、学内外の教室やコミュニティで国際的な交流が実施できない。同様の課題は、世界各地の高等教育機関でも生じている。そこで、海外の語学学習者と連携し、それぞれにターゲットとする言語（日本語と英語）の母語話者とオンラインで交流をし、コミュニケーション力の強化と異文化への理解と関心を深めることを目的とした。実際に言語を使用する交流を通じて、自身の言語能力を振り返り、更なる学習の動機付けを図る。具体的には以下の学習目標を提示した。

学習目標：

①それぞれの学習言語を使用してコミュニケーションをする

②言語の壁を乗り越える経験をする

③文化的な違いを認識する

④交流会を通して異文化に対する理解を深め学習動機を高める

4–2. 交流内容（シラバス）

同様のヴァーチャル交流は、昨年度試験的に実施している。２年目となる今回のプロジェクトでは、「英語」で「知らない人と話す」という二つの抵抗感を少しでも軽減するために、①事前に非同期で交流をする、②話す内容を事前に用意する、など、学生の声を反映し、段階的な学習と交流計画を立てた。ヴァーチャル交流を授業の一部に計画的に取り込み、パートナー大学と共同作業ができるようシラバスを作成し、非同期型交流から同期型交流へと展開した（表１参照）。全体として４週間のプログラムだが、通常の授業と並行して課題とともに準備を進めた。言語の障壁を軽減するために、書く課題からアウトプットする（話す）課題へと、少しずつ難易度を上げている。交流面では、事前にお互いの顔と名前、興味のあることなどを動画で共有し、共通点の発見や興味関心を高め、非同期チャットによる交流からオンライン対面交流と発展させた。

また、当初は予定していなかったが、両大学の学生たちからの要望があり、２ヶ月後に再度交流会を実施した。事前に参加できる学生を確認し、課題として質問を３つ用意し、交流会終了後にそれらの質問の回答を提出することで、会話の準備を徹底させた。

表１　共通シラバス：スケジュール（第１回目交流会）

Stage & Week		Objective/Outcome	Activity/Task	Tool	Modality
Preparation	1	Get ready for communication. Learn language for introduction.	Write introduction.	N/A	N/A
Group project/ Intercultural activity	2	Develop team collaboration. Identify their own culture and explain it.	Discuss the contents of movies to present their own culture. Make movie in a group.	Flipgrid	asynchronous
Ice breaking	3	Get ready for the meeting. Learn about partners.	Watch movies and post comments on a Flipgrid.	Flipgrid	asynchronous
Language Experience/ Intercultural Communication	4	Experience L2 communication in a real situation. Communicate effectively in foreign language. Gain confidence to communicate in foreign language. Learn cultural differences.	Talk about their school life, study area, hobbies by L2.	Zoom	synchronous
Individual Reflection	4	Evaluate learning experience.by identifying their changes.	questionnaire	Google form	asynchronous (within a week after project)
Project Reflection	4	Evaluating project by getting feedback from students	questionnaire	Google form	asynchronous (within a week after project)

５．調査結果

⑴　WTC について

WTC のアンケートは、最初の交流会実施前（11 月，T1）と２回目の交流会終了後（１月，T2）の２回に分けて実施した。WTC は、使用言語に関わらず人とのコミュニケーションを回避する傾向もあるだろう。そのため日本語における WTC（WTC J）と英語における WTC（WTC E）の傾向を参加者（Y）と非参加者（N）それぞれ調査した。数値が低い方が、コミュニケーションをとる傾向が高い。その結果、交流会参加者の日本語にお

表２　参加者と非参加者の WTC の変化

参加	WTC J	WTC E_T1	WTC E_T2
Y	2.17	3.39	3.65
N	2.77	4.63	4.3

けるWTCは、非参加者より高い。次に、英語によるWTCを日本語と比較すると英語のコミュニケーションに非積極的ながらも、参加者の方が積極的であることがわかる。しかし、交流会後の調査では、参加者のWTCは若干ネガティブに変化していた。

⑵　国際的志向性の変化

交流会参加者の国際的志向性について、カテゴリー別に交流会前（T1）後（T2）の平均点を出し表3にまとめた。数値が高い方が、国際的志向性が高いことを意味している。交流会前後の結果をみると、1.のみ平均点が上昇し、その他においては全てにおいて若干のマイナス傾向にあった。

表3　国際的志向性の変化

	T1	T2
1 身近な異文化へのリアクション	23.93	26.20
2 国際的な職業への関心	19.33	19.27
3 違いに対する反応	20.2	18.74
4 海外での出来事・国際問題への関心	15.07	14.07
5 世界に伝えたいことがあるという意識	19.87	19.07

⑶　自由記述より

WTCの調査とは別に、交流会参加者へ自由記述のアンケートを各回に実施した。頻出語には「楽しい」（6件）「嬉しい」（5件）などポジティブなものが多い。そして「ゲームやアニメなど共通の趣味」が会話を成功させた秘訣であった（5件）。また、相手の学生の日本語力に助けられて、会話が成功した（4件）という認識もあり、双方にターゲット言語の知識があることにより、その知識を最大限活かして交流をしようとする姿勢がみられた。「もっと話せるようになりたい」「自分の英語が通じた」（各3件）というポジティブな回答がある。一方で、「話すのは書くより難しい」「文法を気にしすぎると言葉が出ない」など、語学力の障壁をあらためて認識しているコメントもあった。また、言語の問題ではなく、相手に自分の考えを伝えるコミュニケーション力に課題を感じている学生もいた（3件）。

6．考察

前年度より工夫を凝らして準備と実践を発展的に企画したにも関わらず、「本物」の交流を通じて「第二言語でコミュニケーションを図る（WTC）」の高まりは、質問紙調査の数値では有意義な結果を得られなかった。また、国際的志向性についても「身近な異文化へのリアクション」のみ高める結果となった。一方自由記述のコメントでは交流会を通じて学ぶ意欲を高めているポジティブな回答が得られた。これらの3点の結果について、本学の学生の特性と学問分野の特性、授業形態、研究デザインの観点から、今後の課題も含めて考察を深めたい。

最初に、質問紙調査の結果について検討したい。今回WTCについては、最初の交流会から2ヶ月後の回答となった。調査対象の授業は、通常はオンデマンドで実施しているた

め、交流会後の２ヶ月間は再び双方向の活動が制限されていたため、授業内で英語による交流や交流会後の反省を活かした授業展開を実施できていない。交流会で感じた「英語が通じて嬉しい」「楽しかった」という「成功体験による自己効力感」を維持させることができなかった可能性がある。また、調査内容について十分な説明ができなかったため、交流会の経験と関連づけて自身の変化を客観的に振り返り、適切な回答を導けなかったことも推定される。国際的志向性の質問紙については、芸術系学生の学問と質問紙にあるキャリアとの親和性が低くイメージが湧きにくいのではないだろうか。しかし、「身近な異文化へのリアクション」という点の意識が高まったことは、有意義であったと考える。

７．まとめと今後の課題

本実践では、国際的な交流により現実的な文脈で英語を使用することにより、学習者の態度がどのように変化するのか、既存の質問紙調査を使用して実施した。過去の実践活動では学習者に有意な結果が報告されたが、質問紙調査において成果は確認されなかった。しかし、自由記述では積極的な発言の方が多く寄せられたことから、芸術系学生にはこれまでの理論枠組みではなく、その特徴に合わせた具体的にイメージのしやすい状況設定の質問を取り入れるべきであることが示唆された。例えば、WTC における「大勢の前でのスピーチ」では「自身の作品説明（展覧会や講評会における）」などである。また国際的志向性においても同様なことが考えられる。芸術系の学生が目指すキャリアは、その専門を活かしたものである可能性が高い。「国際機関で働く」というイメージや目標を持っている学生は多くないだろう。そのため「国際的に活躍するアーティスト」「海外での制作・演奏活動」など、芸術系の学生のキャリアに即した質問に変えて作成することを検討したい。今後、既存の理論枠組みを応用し、学問体系に即した調査計画を設計することが課題である。

引用・参考文献

Macintyre, et el. (1998) Conceptualizing Willingness to Communicate in a L2: A Situational Model of L2 Confidence and Affiliation, *The Modern Language Journal*, 82, 545–562.

Dörnyei, Z. (1994) Motivation and Motivating in the Foreign Language Classroom, *The Modern Language Journal*, Vol. 78, No. 3 (Autumn, 1994), 273–284.

Knight, J. (2008) Higher Education in Turmoil: The Changing World of Internationalization (Global Perspectives on Higher Education). Sense Pub.

Hudzik, J.K. (2022) Mapping the Future of Higher Education Internationalization, *NAFSA*, https://www.nafsa.org/ie-magazine/2022/8/3/mapping-future-higher-education-internationalization,（2022年10月24日最終閲覧）

Yashima, T. (2002) Willingness to communicate in L2: The Japanese EFL context. *The Modern Language Journal*, 86, 54–66.

————. (2009) International Posture and the Ideal L2 Self in the Japanese EFL Context, *Motivation,*

language identity and the L2 self, 144–163.

Yashima, et al., (2004) Influence of attitudes and affect on willingness to communicate and L2 communication. *Language Learning*, 54, 119–152.

————. (2009) International Posture and the Ideal L2 Self in the Japanese EFL Context, *Motivation, language identity and the L2 self*, 144–163.

Stallivieri, L. (2022) Virtual Internationalization of Higher Education: Digital Environments and Beyond., *Internationalization of Higher Education after COVID-19: Reflections and New Practices for Different Times*, 292–306, AMPEI.

Botes, A. et al. (2020) A Systematic Narrative Review of International Posture: What is Known and What Still Needs to be Uncovered. *System*, 90, 1–12.

飯野厚（2015）「ビデオ会議による異文化間コミュニケーションが英語スピーキング力と国際的志向性に及ぼす影響」『経済志林』83(1), 121–143.

岩﨑千晶他編（2022）『大学生の学びを育むオンライン授業のデザイン―リスク社会に挑戦する大学教育の実践―』関西大学出版.

ヒュー・ローダー他編（2012）『グローバル化・社会変動と教育１』東京大学出版会.

堀さやか，箱守喜満子，藤田清士（2022）「コロナ禍におけるバーチャル留学と英語学習意欲に関する探索的調査」『大阪大学高等教育研究』10, 33–40.

八島知子（2001）「『国際的志向性』と英語学習モーティベーション―異文化間コミュニケーションの観点から―」『関西大学外国語教育研究』1, 33–47.

渡邊万里子（2017）「日本人英語学習者の Willingness to Communicate とコミュニケーション活動における伝達内容」『中部地区英語教育学会紀要』46, 71–78.

松崎久美（2021）「大学生初年次の英語に関する意識調査―名古屋芸術大学における全学共通科目「英語１」受講生に対するアンケートより―」『名古屋芸術大学紀要』42, 319–327.

松崎久美（2022）「英語を使用した海外の学生とのオンライン交流が英語学習意欲に与える影響について」『名古屋芸術大学紀要』43, 319–327.

内閣官房（2013年６月）若者の海外留学促進のための関係省庁等連絡会議，内閣官房：https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/ryuugaku/index.html（2022年10月24日最終閲覧）

文部科学省（2021）「新型コロナウイルス感染症の影響による学生等の学生生活に関する調査（結果）」https://www.mext.go.jp/content/20210525-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf（2022年10月24日最終閲覧）

文部科学省（2022年３月30日）「外国人留学生在籍状況調査」及び「日本人の海外留学者数」等について，https://www.mext.go.jp/content/20220603-mxt_gakushi02-100001342_2.pdf（2022年10月24日最終閲覧）

付録　質問紙調査

コミュニケーション意欲（WILLINGNESS TO COMMUNICATE）を測る質問

次に示すような英語もしくは日本語で話す状況で、コミュニケーションをするかしないかは、全くあなたの自由だと仮定してください。それぞれの状況において、下の１～６の中からもっともご自分に当てはまるものを選び〇をしてください。

1	2	3	4	5	6
常に話す	たいてい話す	ときどき話す	あまり話さない	めったに話さない	決して話さない

英語で　１．大勢の前でスピーチをする機会があるとき
２．列に並んでいて知り合いが前にいたとき
３．英語の授業中のグループディスカッションのとき
４．初めて会う人のグループで話す機会があったとき
５．英語の授業中に自由に発言する機会があるとき
６．列にならんでいて友達が前にいたとき
７．英語のクラスで前に出て話す機会があるとき
８．友人のグループで議論するとき

日本語で　１．大勢の前でスピーチをする機会があるとき
２．列に並んでいて知り合いが前にいたとき
３．英語の授業中のグループディスカッションのとき
４．初めて会う人のグループで話す機会があったとき
５．英語の授業中に自由に発言する機会があるとき
６．列にならんでいて友達が前にいたとき
７．英語のクラスで前に出て話す機会があるとき
８．友人のグループで議論するとき

国際的志向性を測る質問

実施の際にスケール名（１から６）をはずし、項目をスクランブルして提示する。*は逆点項目として処理する

各設問に対し、６つの選択肢から最も自分に当てはまるものを一つ選んでください。

1	2	3	4	5	6
全くそうではない	そうではない	あまりそうではない	どちらかというとそうである	そうである	全くそうである

１．Intercultural approach (-avoidance) tendency（身近な異文化へのリアクション）
１）日本に来ている留学生など外国人と（もっと）友達になりたい。
２）外国の人と話すのを避けられれば避ける方だ。*
３）日本の学校で留学生がいれば気軽に声をかけようと思う。
４）留学生や外国人の学生と寮やアパートなどでルームメートになってもよいと思う。
５）日本で地域の外国人を世話するような活動に参加してみたい。
６）もし、日本で隣に外国の人が越してきたら困ったなと思う。*
７）日本で、レストランや駅で困っている外国人がいれば進んで助けると思う。

2．Interest in international vocation（国際的な職業への関心）

8）故郷の街からあまり出たくない。*

9）外国で仕事をしてみたい。

10）国連など国際機関で働いてみたい。

11）国際的な仕事に興味がある。

12）日本の外の出来事は私たちの日常生活にあまり関係ないと思う。*

13）海外出張の多い仕事は避けたい。*

3．Ethnocentrism（違いに対する反応 Reaction to different customs/ values/ behaviors）

14）外国の人の言動に違和感を感じることがある。

15）自分と習慣や価値観の異なる人より似た人とつきあう方が好きだ。

16）習慣や価値観の異なる人と協力して物事をすることは楽しい。

17）自分に似た考え方、価値観をもった人と一緒に仕事をしたい。

18）習慣や価値観の異なる人は苦手だ。

4．Interest in foreign affairs（海外での出来事・国際問題への関心）

19）外国に関するニュースをよく見たり、読んだりする。

20）外国の情勢や出来事について家族や友人とよく話し合うほうだ。

21）国際的な問題に強い関心をもっている。

22）海外のニュースにはあまり興味がない。*

5．Having things to communicate (Willingness to communicate to the world)（世界に伝えたいことがあるという意識）

23）世界の人々と話したい内容を多くもっている。

24）世界に向かってアピールしたいことがある。

25）環境問題や先進国と途上国の経済格差問題などについて意見をもっている。

26）世界の人々と話すとなると何を話してよいかわからない。*

27）国際的な諸問題について特に意見はもっていない。*

28）外国人の友人と話したいことがたくさんある。